

統合型プロジェクトによる新潟学の推進[†]

關尾史郎・荻美津夫

新潟大学人文学部

本プロジェクトは、人文学部「社会・地域文化学」主専攻プログラムの中核科目である実習科目について、従来の個別の取り組みから教育研究への体制としての位置づけを行い実践したものである。実習調査は長岡・柏崎・佐渡市で行われた。長岡・柏崎市の「社会調査実習」では「中越地震・中越沖地震からの復興と地域のつながり」をテーマにした調査が市民の協力の下で行われた。佐渡市においては同市教育委員会の協力を得て民俗学・地理学・芸能論実習が計画的・統合的に実践された。その結果、学生のチームワーク力やリーダーシップ力等の教育的成果が得られ、刊行された調査報告書や地元での現地報告会の開催は、研究成果として地元還元され、地元に着した形で地域貢献に寄与した。年度末にはFD「新潟大学GP 統合型プロジェクトによる新潟学の推進」を開催し、学外から有識者を招いて外部評価が行われた。ここでは、あらためて実習授業のもつ教育面の有効性を確認する場になったが、調査実習の課題等が議論され、今後への方向性が示された。

キーワード：教育・研究・地域貢献、実習系科目の展開、地域との連携、佐渡学、新潟学

1. はじめに

本報告では、まずプロジェクトの目的・達成目標、実施・評価体制等について記す。次に実践された各実習の内容について具体的に述べ、最後にFDとして行われた外部評価結果を基に、評価されるべき点と残された課題についてあげていく。

2. プロジェクトの目的と実施体制

2.1. プロジェクトの目的と達成目標

2.1.1 プロジェクトの目的

本プロジェクトは、佐渡をはじめとする新潟県全域をフィールドとして人文学部の実習系科目を展開し、その成果をフィールドとなった地域社会に還元することを意図するものである。実習系の授業科目とは、現行カリキュラムで「人文基幹Ⅰ種」にグルーピングされている科目であり、具体的には「社会調査実習」「日本史実習」「考古学実習」「地理学実習」「民俗学実習」「芸能論実習」、および「情報文化実習」などである。「日本史実習」と「情報文化実習」を除く科目は、「社会・地域文化学」主専攻プログラムにおいて中核科目として位置づけられているものであり、かつ教員（地歴科）、学芸員や社会調査士などの免許・資格を取得するためにも必須科目に指定されているものである。

開講形式は、複数の日数にわたって特定のフィールド

において合宿形式で調査を行い、その成果を報告書にまとめて刊行するものである。しかし、調査を円滑に進め、学術的にも期待される成果を上げるためには、当該のフィールドを抱える自治体による支援が必要でありかつその成果を、自治体をはじめとする地域社会に可及的速やかに提供・還元することが求められる。

本プロジェクトは、まさにこのような課題に対処しながら、「新潟学」の推進を通じて県内最高学府としての本学の社会的な使命を果たすことを目的とするものである。

2.1.2 プロジェクトの達成目標

実習系授業は演習系授業とは異なり、集中という開講形式をともなう行われるため、学生はフィールド付近における合宿という形式で履修することになる。したがってチームワーク力やリーダーシップ力の養成、さらには授業の進行自体が、地域の行政担当者や住民の協力や支援に多くを負っているため、彼らとの関わりのなかでコミュニケーション力の向上が期待される。また地域における報告会や年度末の報告書の作成作業も、かかる諸力の養成や向上に貢献することになる。さらに、本学が立地している新潟県の文化や社会のすばらしさや課題を認識することができ、地域社会の一員としての自覚を培うことが期待される。

2.2. プロジェクトの実施・評価体制と評価の方法

2.2.1 プロジェクトの実施・評価体制

人文学部の教育計画を推進していく教育計画委員会（教育担当副学部長が委員長を兼務）を中心として、同委員会GP準備WG,およびGP推進委員会などが、本プロジェクト推進の管理と運営を担当する。開設授業科目の調整・立案については、学務委員会（学務担当副学部長が委員長を兼務）が「学部附置越佐・新潟学推進センター（グローバル新潟発見部門・地域映像アーカイブ部門・佐渡学部門）」運営委員会と打ち合わせながら進める。また地域社会との連携については、学部の社会連携委員会（「学部附置越佐・新潟学推進センター」長が委員長を兼務）が担当する。

点検評価については、点検評価委員会（学部長が委員長を兼務）、同委員会WGなどが中心になって進める。

2.2.2 評価の方法

学外から有識者を招いてFDを開催する。また、学部による自己点検評価、学生によるポートフォリオ、授業評価アンケート、地域で開催する報告書でのアンケート、出前授業を聴講した生徒の感想などを、学務委員会が集約し、点検評価委員会と同WGが総括し、その結果を情報・広報委員会が学部長の指示に基づいて学部ホームページなどを通じて公表する。

3. 調査実習とその成果

本年度新潟県内をフィールドとして調査・実習を行ったのは、「社会・地域文化学」主専攻プログラムの「社会調査実習」「地理学実習」「民俗学実習」「芸能論実習」である。「社会調査実習」では柏崎・長岡市において市民の協力・参加の下で行われ、「地理学実習」「民俗学実習」「芸能論実習」では佐渡において佐渡市教育委員会の協力と、調査地地元の人々の協力・参加を得て調査が行われた。詳細については、以下の通りである。

3.1. 「社会調査実習」の概要

3.1.1 「社会調査実習」の目的と日程

新潟県は、近年2度の大地震を経験し、多くの犠牲と損害があったが、地域のつながりが再認識された。本年度は、「地元の大学の学生として、被災者の語りに耳を傾け、被災地の現状を探り、被災地からの発信を手伝うこと」を目的とした。

調査地域や日程などは以下の通りである。

調査地域：柏崎市・長岡市山古志地域（旧山古志村）

調査期間：柏崎市（9月6・13・16・17日）、

山古志地域（9月9・14・15・17日）

調査方法：「中越地震・中越沖地震からの復興と地域のつながり」について、後に帰郷した人々へのアンケートやインタビュー

参加学生：2年生19名

実地調査までの授業日程：5月6～27日に文献の検討、6月3日にテーマの検討・グループ分け、6月10～24日にアンケート調査項目の検討・アンケート調査票の作成、7月1～29日にインタビュー調査準備（質問項目・調査予定）、7月22日にアンケート調査票の発送、6月27日「女たちの戦災復興」、7月17日「市民復興祭」に参加。

3.1.2 アンケート調査とインタビュー調査

・アンケート調査

アンケート調査対象者：柏崎市民20歳以上の1,000人（住民基本台帳から無作為に抽出）

回収数：548通（回収率は54.8%）[松美町内会全世帯（475世帯）へのアンケートは217通の回収、45.7%の回収率]

・インタビュー調査

Aグループ（「中越沖地震におけるボランティア」）

9月6日-柏崎市比角コミュニティーセンター

9月17日-同市社会福祉協議会

Bグループ（「松美町内会を通してみる中越沖地震」）

9月16・17日-柏崎市松美町内会集会所

Cグループ（「山古志の復興と今後」）

9月9・10日-長岡市旧山古志村池谷集落集会所

Dグループ（「震災とジェンダー」）

9月13日-柏崎市民プラザ

14・15日-長岡市ウィルながおか



7月17日の「市民復興祭」に参加

3.1.3 調査結果の集計と報告書の作成

2学期10月14～21日にアンケート調査結果の集計・分析, 12月2～16日にインタビュー調査結果の集計・分析を行い, 2月28日に調査報告書『中越地震・中越沖地震からの復興と地域のつながり-2010年度社会調査実習報告書-』を刊行した。

3.2 「地理学実習」の概要

3.2.1 「地理学実習」の目的と調査地

佐渡の世界遺産指定にむけた基礎的調査として, 佐渡市西三川地区(笹川)の砂金採取に関連した文化的景観の復原と現状の景観の把握作業を行う。今年度は昨年度の実習で行ったガラ調査, 土地利用現況調査に引き続いて, 通称地名や土地評価等についての聞き取り調査を行った。

調査地: 笹川集落

調査地の環境: 笹川集落は金山(十八枚)と笹川の2つの地区からなり, 村域はもともと隣村である小立村と西三川村の入会地であった。江戸期には佐渡奉行所から金山役が派遣され屋敷をかまえていた。江戸期以降, 産金量は減少し明治5年閉山した。明治以降, 新田開発, 炭焼きへと生業は転換された。

3.2.2 野外調査と聞き取り調査

野外調査のテーマ:

- ・ 笹川集落内部におけるガラ石の分布確認
- ・ 笹川集落に関わる耕地におけるガラ石の分布の確認
- ・ 笹川集落および耕地の江戸期以来の変遷を歴史的に跡づけるために, 土地利用の現況を把握

調査時期: 平成21年度の夏と初冬

参加学生: 7名

同時に, 通称地名や土地評価などに関して聞き取り調査を行い, 集落に保存されていた明治期更正図を閲覧した。



聞き取り調査

3.2.3 課題

通称地名などに関しては, 古老への聞き取り調査だけではわからないことが多く残された。これについては, 3月上旬に全世帯に対してアンケート調査を配布した。3月下旬には現地報告会を行い, この時には補充調査を行った。

3.3 「民俗学実習」の概要

3.3.1 調査地・日程と調査事項

調査地: 佐渡市徳和(旧赤泊村)の大棕神社氏子集落の浅生・畝立・瓜生・草木・鍛冶屋・清水・小熊・徳和浜(122戸からなる)

調査期間: 夏期調査(平成22年8月8日～12日), 冬期補充調査(平成23年2月8日～11日)
(ほかに平成22年9月14～16日に大棕神社祭礼調査を行った)

参加学生: 19名

調査事項: 民俗事象全般(地域の環境, 地域組織, 家族生活, 親類つきあい, 衣類, 食事, 住居, 農業, 漁業, 山仕事, 冠婚葬祭, 年中行事, 神社・寺院の行事, 家の神仏, 民俗芸能, 昔話・伝説, 民謡など)

3.3.2 現地報告会の概要と成果

現地報告会の時期: 冬期補充調査期間中の平成23年2月10日

参加者: 教員3名, 学生7名, 調査地話者等10数名

報告内容: 衣類, 芸能, 信仰(神社・屋内神), 口承文芸, 生業(農業), 食, 村落に関する学生自身による調査結果

報告後質疑応答が行われた。住民からも体験談やアドバイスなどがあり, 双方向的な意見交換の有意義な会となった。



大棕神社祭礼に参加する

[資料・報告]

現地報告会の成果：次の4点をあげることができる。

- ・地域の理解を得ること、コミュニケーション力の向上、チームワーク力養成については意義が大きい。
- ・調査の不備を自覚する良い機会となった。
- ・質疑応答の時間などで新たな情報が提供され、正確な理解に近づいた。
- ・従来は報告書刊行以前に学生が各自の見解を示す機会はなかった。報告会の実施により双方向的な意見交換の機会の重要性を確認した。

実習調査の課題：調査地の設営そのものが困難になってきていることがあげられる。

新聞報道：現地報告会の様子は、平成23年2月16日付「新潟日報」新聞において大きく報道された

3.4.「芸能論実習」の概要

3.4.1 「芸能論実習」の日程と調査地

調査対象：牛尾神社天王祭の芸能（佐渡市新穂潟上）

調査期間：平成22年6月12・13日

補充調査：8月29日

調査内容：薪能・巫女神楽・大黒舞・鬼太鼓、神社の由緒や芸能に関わる装束・採物・仮面・伴奏楽器等

参加学生：17名

3.4.2 目的と方法

目的：佐渡は「芸能の島」と称されるように芸能の宝庫である。牛尾神社の芸能は、前日の宵宮の薪能・鬼太鼓が当社の能舞台上やその前で行われ、当日には巫女舞・大黒舞・下り羽、吾潟・潟上の二種の鬼太鼓と多種多様である。また、巫女舞は巫女神楽として行われており、弥彦神社の巫女神楽である小神楽との比較が重要である。

方法：ノートへの記録（芸態・採物・楽器等）、演技者へ対する聞き取り、撮影したビデオテープ（学生を4つのグループに分け、それぞれ1つずつの芸能を担当させた）

3.4.3 成果と課題

成果：次の4点

- ・聞き取り調査を通して演技者である地元の方々とのコミュニケーションがはかられ、民俗芸能を伝承する意義や大切さなどを学ぶことができた。
- ・楽器・装束・仮面等を直に手に取るなどの貴重な体験ができた



牛尾神社の巫女舞

- ・平成22年12月5日に、弥彦村弥彦神社の巫女舞である小神楽を調査し、牛尾神社の巫女舞との比較検討を行い、芸能論としての学問的成果を得た。
- ・これらの結果は報告書『佐渡牛尾神社天王祭の芸能と弥彦神社の小神楽』として刊行した。

課題：これらの調査を同一箇所において重ねて調査を行い比較することの必要性、民俗芸能の練習段階からの調査や聞き取りを行うことなど

4.外部評価と今後の課題

4.1 FDによる外部評価開催日時と次第

平成23年3月14日午後3時00分～5時00分まで総合教育研究棟B棟プレゼンルームにおいて「新潟大学 GP 統合型プロジェクトによる新潟学の推進」FDを開催した。前半では、芸能論・社会学・地理学・民俗学による実習報告があり、質疑応答が行われた。後半には、まず社会学と地理学の2つの実習に参加した学生からの報告があり、続いて外部評価者としてお招きした新潟市歴史博物館館長小林昌二氏よりコメントをいただいた。本来外部評価委員として、神奈川大学外国語学部・大学院歴史民俗資料学研究科教授福田アジオ氏も参加予定であったが、東日本大震災の影響で出席できなかった。福田氏からは、事前にお送りしていた資料に基づいて書面でコメントを頂戴した。

4.2 コメントに基づく評価と今後の課題

4.2.1 取り組みへの評価

以下の評価は、いずれも小林昌二氏と福田アジオ氏のコメントによるものである。

- ①従来の個別の取り組みから教育研究への体制としての位置づけが評価される。
- ②これを基礎に地域との連携、成果の地域への還



FDIによる外部評価

文化実習」など他の主専攻プログラムでも展開していく。

- ・このような実習を実践するために、佐渡市教育委員会以外にも、新潟県内の他の市町村との連携関係を進めることが求められる。

2011年5月9日受理

元が諮られ、新潟学が県内住民の将来へ向けての貢献になることが期待される。

- ③チームリーダー力・リーダーシップ力の養成、コミュニケーション力の向上が評価される。
- ④キャリア形成との接続点がみられることが評価される。
- ⑤報告書の作成、現地報告会の開催などによって、地域社会への理解が進み、学生には地域社会の一員としての自覚が芽生え、地域においては今後の方向性への資料を与えるなど、地域社会への貢献として評価される。

4.2.2 今後に望まれることと課題

以下の「今後に望まれることと課題」は、いずれも小林昌二氏と福田アジオ氏のコメントによるものである。

- ①実地調査にあたっては「調査地被害」を生じないような配慮が必要であろう。
- ②調査課題のみならず全体的・全人格的に学ぶ姿勢など、地域で学ぶ姿勢の維持が望まれる。
- ③「地に足を付けた」コミュニケーション力、現場に身を置いているという自覚が大切である。
- ④合宿は「籠もる」のではなく、地域の「風景」となり地域の気配を感じるセンスを磨くことが望まれる。

4.2.3 今後の方向性への課題

- ・本新大GPでは「社会・地域文化学」主専攻プログラムの「社会調査実習」「地理学実習」「民俗学実習」「芸能論実習」において実践をこころみだが、今後は「考古学実習」や「歴史文化学」主専攻プログラムの「日本史実習」・「古文書学実習」,「メディア・表現文化学」主専攻プログラムの「情報